

令和7年度 東京藝術大学大学院美術研究科博士課程学位論文要旨

枠を満たす空気

東京藝術大学大学院美術研究科

博士後期課程美術専攻日本画研究領域

学籍番号 1323904 堀田紅音

論文要旨

人は意志を持って絵や文字を記そうと思った時、無意識に眼前にある物質を描かれる場所として認識する。例えば自然洞窟の岩壁に絵や文字を描こうとした時、そこはただの岩壁ではなく行為の痕跡が刻まれる岩肌として認識されはじめる。大事な話を忘れないようにしようと思った時、目に留まった紙切れは言葉を書いて保存するメモの役割を果たす。そしてコピー用紙にノートを取ろうとした時、封筒に宛名を書こうと思った時、無いはずの罫線を頭の中で補完しながら文字を記す。大きく記すか、小さく記すか。端に記すか中央に記すか。間を取るか詰めるか。これらは用途や目的に応じて、もしくは描かれる場所として認識された物質のサイズ、記述を許可された範囲に対して、書き手の身体性を含む様々な思考を介すことで変化するだろう。これらの描かれる場所として認識された物質は、物質である限り無限ではなく、必ず終わりがある。その終わり際、もしくは記述を許可された範囲の淵のことを、私は「枠」と捉えている。

絵画制作とは、そのうちの一つに、描かれる場所として認識された物質＝枠内に行為の痕跡を残していくものであると言えるだろう。その動機や手法は制作者によって様々であるため、やや乱暴な記述かもしれないが、元を正せば一つの要素として大きく飛躍してはいないはずだ。私の場合、制作のための構想や取材などを除く行為としての絵画制作を始める時、まずは描かれる場所としての物質を用意する。この瞬間から眼前の物質は、私の意思によって誕生した自由と責任を伴う空白の画面となり、自由な奥行きや広がりを設定することが出来る。物質としては終わりがあるはずのその画面に、自分の意志によってどうすることも出来てしまう未知の空間としての無限を感じ、その空白に対して何か恐怖心のようなものを抱く。0という空白に無限を見ると同時に、描かれる場所としての物質の終わり際＝「枠」を有する空白の画面を、私は「真空の枠」と呼んでいる。そして無限を連想させる空白に対する恐怖心から逃れるために、画面を描画の痕跡で埋め尽くさなくてはならない、という強迫観念的な情動に突き動かされている気がするのである。この時の描画の痕跡を「真空の枠」に対して「空気の粒」と呼んでいる。私はこの情動を原初の造形原理と考え、自身の制作ができるだけこの近くにありたいという願望を持つ。本論文は、描かれることを前提とした空白の画面を「真空の枠」、描画の痕跡を「空気の粒」と捉える私が「枠を空気で満たすこと」を創作の形とする絵画の制作論である。この制作論を通して原初の造形原理について再考し、「真空の枠」の前に立った私に向けられているように感じる「ここで何をするのか」「何

ができるのか」という「絵画の問い」に対する私の回答が、原初の造形原理に基づいたものであると示す。そして枠の内側で展開される制作論がその外側にどのように接近するのか、もしくは接続することは可能なのかを検討することを本論の目的とする。

本論文は3章構成で論述する。以下に本論文の章立てを述べる。

第1章「枠の内圧を高める」では、自作品において空間畏怖的な表現を行う理由と目的について論述し、私が目指す絵画における内圧が高い状態とはどういったものを指すのかを解説した。第1節では、私の視力や視野が絵画の制作に及ぼす影響について明らかにした。視覚芸術である絵画の制作と鑑賞体験において身体を伴う「見る」という行為によって得られる視覚情報は、枠の内圧を高めるための重要な要素の1つであることを論述した。第2節では、自作品における主な使用画材と「描く」という行為の欲望や情動の相関性を考察した。また、絵画の中に行為の痕跡として表れる時間の蓄積は日本を含む東洋の文化の特徴としても指摘されている。絵画や詩歌を含む日本文化史の事例として絵巻物を参照し、等価的に並ぶ現在という「粒」の存在が自作品を構成する要素として重要なものであることを明らかにした。第3節では第1節と第2節を踏まえ、作品を取り巻く複数の視点が循環する環のような構造にあることを論述し、生物学における環世界が自身の制作行為と重なることを考察した。

第2章「空気の密度―枠の中を満たす」では、自作品で選択されたモチーフやその取材方法とそれらを使用した画面の組み立てについて論述するとともに、美術史上において芸術活動が様々な学問分野との関係性の上で行われてきたことを再検討した。その上で「枠を空気で満たす」という創作の形を持つ制作者の一人として、芸術活動の根源への接近を試みた。第1節では、制作準備の取材に顕微鏡を用いることで発展していった自作品の変遷を辿り、西洋美術史における抽象絵画の覚醒の歴史的事例を参照しながら既存の芸術作品との共通点及び差異を検証した。第2節では枠が持つ効果について考察し、概念としての枠と記述を促す視覚的な枠が自作品にどのように作用しているのかを明らかにした。第3節では児童画に見られる造形原理を自身の制作の動機と比較し、その重なりを考察することで、描いて埋めるという強迫観念的な情動が原初の造形原理に基づくものであることを論述した。また、これに深く関連づけられる限界芸術論に自作品を位置付けることを試みた。

第3章「提出作品」では前述までの章を踏まえ、提出作品について解説した。第1節では近年の自作品の制作において参照する事象や、作品の構造や組み立てとして隣接すると考えられる既存の芸術作品について考察した。第2節ではここまで述べてきた事柄を踏まえ、提出作品について解説した。「真空の枠」の中を「空気の粒」で満たす過程の中で起こる自己矛盾について、私は自覚的である。制作の中での相反する思考や行動原理は、私にとっては一つの枠の中で起きる複数の真理であることを制作プロセスの解説をすることで示した。

「おわりに」では1～3章までの検討を経て、今後の課題と展望を述べた。向かう道筋を明らかにして本論文の結びとした。